**陵墓・玉陵（たまうどぅん）概要**

玉陵は、1470年から1879年に在位した歴代琉球国王 19人と王族の遺骨が安置されている非凡な陵墓です。父尚円王の遺骨を納めるため、第二尚氏王朝の第三代尚真王によって1501年に建てられました。琉球の人々は、先祖の墓を守護神の廟として崇拝します。玉陵は、琉球列島における王の統治を体現し、王府の力を象徴するものでした。

 自然の地形と調和した墓を建設する伝統に従って、玉陵の３つの墓室は、石灰岩の崖下にあった天然の洞窟の岩盤を徐々に掘り広げることによってつくられました。美しく整形された琉球石灰岩で作られた建物外観の意匠は、琉球の宮殿の建築様式に基づいており、本来は木製の垂木や扉などの部分を忠実に再現した石の細工で装飾されています。墓の前の石垣には、獅子、蓮、龍などの彫刻がほどこされた欄干がついています。屋根は、厚い木のこけら板を模した濃い灰色の瓦で覆われています。天然の岩の崖肌の一部が残されており、建物のデザインに組み込まれています。琉球の伝統的な石彫刻の例である石の獅子（シーサー）が三体、台座に乗って墓を守っています。元々はきらめく白い漆喰が塗られていた建物の外見は、現在では多様な質感を持つ馴染みの良い魅力的な灰色です。

 東の墓室（陵墓に向かって左側）は、繊細な装飾が施された石棺に納められた王と女王の遺体を安置するための部屋で、西側の墓室（右側）は他の王族のための部屋でした。中央の墓室は、死者の骨を清める儀式の前の一時的に安置するためのものでした。

 玉陵に入るには、土で舗装された広い前庭と、自然に白くなった枝状サンゴのかけらが敷き詰められた中庭を通ります。これらの庭には、意図的に左右の幅が不ぞろいにしてある両開きの扉がついた狭いアーチ型の石の入り口があります。中庭には、誰を陵墓に埋葬してよいかが記された1501年に建てられた石碑があります。その外側にはもともと1748年に建てられた2つの番所がありました。そのうち1つは2003年に再建されています。玉陵は、1945年の沖縄の戦いでアメリカ海軍の砲弾の直撃を受け、特に東の墓室が大きく損壊しました。建築時と同じ材料を使いながら3年間かけて慎重に行われた修復は、1977年に完了しました。